

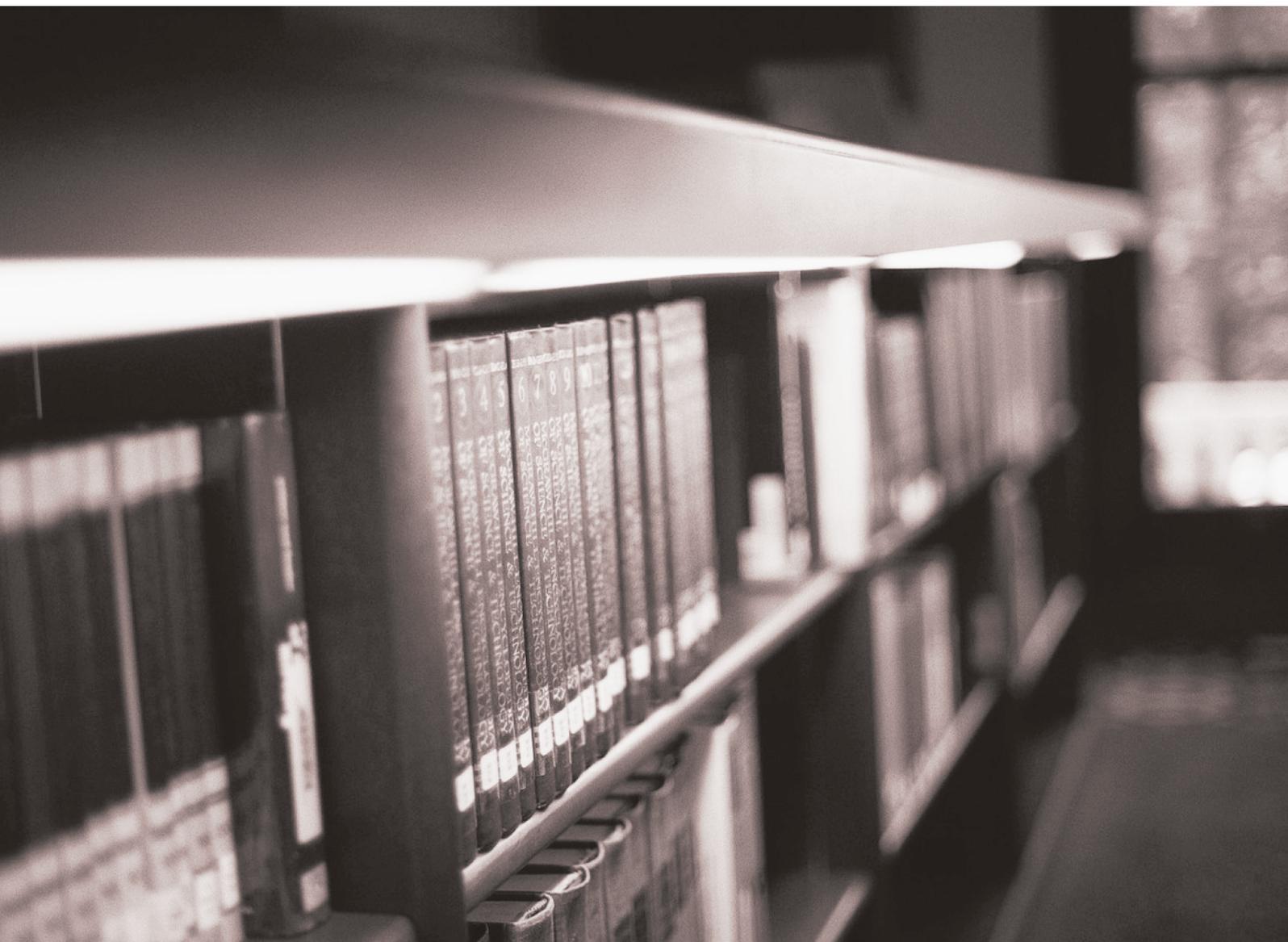
ISSN 1344-5081

北海道教育大学附属図書館

図書館報

85号

平成22年10月8日発行



02

構成館長エッセイ

函館館長 上山 恭男
旭川館長 和田 恵治
岩見沢館長 岡嶋 恒

05

大学図書館における写真の展示

06

特集 私の薦める一冊の本

11

図書館統計

12

附属図書館からのお知らせ

構成館長 エッセイ

絵本のことなど

附属図書館函館館長 上山 恭男

本学では平成20年度以降、各キャンパスに絵本コーナーが設置され、函館館にも750冊余りの絵本が図書館カウンター近くの特設コーナーに並んでいる。

絵本との関わりですぐに思い浮かぶのは、ここ十年来、「絵本の力」を再発見すべく積極的な絵本推進活動を展開しているノンフィクション作家の柳田邦男氏である。氏の著書『大人が絵本に涙する時』のあとがきに、以下のような件がある。

このところ、「大人こそ絵本を」という私の呼びかけがずいぶん広まってきて、各地に講演に招かれることが多くなった。絵本は子どものためのものという誤解があり、大抵の大人は子育て中でもない限り、絵本を読もうとしない。惜しいことだと思う。絵本は、子どもたちが第一の対象ではあっても、実は読む人の人生経験が豊かになるにつれて、内容を深く味わえるようになる素晴らしいメディアであり、自分自身の生き方や心の持ち方や子どもの心の成長などを考えるための滋養分となるものなのだ。

図書館でしばし学生の様子を見てみると、絵本コーナーで足を止める学生もたまに見受けられるが、まだまだ絵本への関心は乏しいようだ。職員によると日に若干名、借り出してゆく学生もあるとのこと、大抵の学生には、「絵本は子どものためのものという誤解」があるのではないかと予想される。柳田氏は、絵本は人生で三度、すなわち子どもの時、子育ての時、そして人生の後半の三度読むべきものと提唱している。私は、学生時代にこそ、上記の誤解を払拭して、幼いときの絵本に親しむことで、生涯の「心の故郷」づくりをしてもらいたい、あるいはこれまで嬉しかったこと、悲しかったこと、辛かったことなど、二十余年の人生経験を絵本の物語と重ね合わせながら深い感動を体感してもらいたいと思う。学生たちには、幼いときの絵本、あるいは新たに巡り合った絵本を通して、自らの心にゆとりや潤いを取り戻してもらいたいと願う。ギスギスした社会であると思えばこそ。

絵本との関わりで、もう一つ思い浮かぶのは、外国語の多読である。多読は外国語学習方法の一つでもあるが、“Input precedes output”と諺にもあるように、たくさんの文字入力があれば、自然に出力が伴うということを狙った学習法である。(ちなみに、たくさんの音声入力は多聴であり、近年、多読・多聴の自律的学習法が注目されている。)多読のきっかけ(スタート)は、絵本が最適である。古川(2010)は、多読の三原則として、①辞書を引かずに楽しめるものを読む、②わかるところをつなげて読む、③自分が面白いと思う本を選んで読む、の3点を挙げている。この三原則は、楽しく多読を続けるためのコツと捉えられるが、外国語絵本であればこの原則に従って、たくさん読むことも可能となるであろう。このことが、延いては外国語の自律的学習に上手く繋がることにもなる。

目下、函館館の絵本コーナーには、英語、ドイツ語、ロシア語など、数ヶ国語の外国語絵本しかなく、多読に耐えうるだけの冊数は、残念ながら英語のみである。まずは、侮らずに、イギリスの小学校の教科書であるOxford Reading Treeシリーズあたりから、読み進めることをお勧めしたい。幸い、イギリス英語とアメリカ英語の両方がCDに収録され、これを聞きながらの読書は、多読・多聴の実践に他ならない。

本学の再編からすでに5年が経過し、函館館も新しい課程の特徴が前面に出るようなシフトが行われてきている。しかし、絵本コーナーについては、学部や課程の再編に関係なく、学生の豊かな心の成長を願う上でも、今後、更なる充実を図っていかなければならないであろう。

参考文献

- 古川昭夫(2010)『英語多読法—やさしい本で始めれば使える英語は必ず身につく—』小学館
柳田邦男(2006)『大人が絵本に涙する時』平凡社
柳田邦男(2009)『みんな、絵本から』講談社

(うえやま やすお)

構成館長
エッセイ

図書館の役割は変わるのか

附属図書館旭川館長 和田 恵治

重厚な建物の中に数多くの蔵書が書棚にびっしりと並び、目指す書物を迷路のような狭い通路の中で必死に探す、そんな大学図書館に抱いていたイメージは膨大な知の空間に圧倒される「一種の心地よさ」にあったように思います。ある意味、敷居が高くて、調べもののために必要に迫られて赴くという以外に、普段から気楽に図書館に出かけるということはなかったように思います。でも「知の雰囲気」に浸るには大学図書館に行けば達成されるので、そのような環境は大学にはなくてはならないものです。しかし、「黙っていてもわかる」時代は終わり、図書館利用者が少なければ、その存在意義が問われる世の中になってきました。図書館も開かれた場としてアピールしていかなければならない社会の流れとなったのです。

ただ、旭川館ではもともと学生ホールに近く、入館しやすい雰囲気にあって従来から学生が気楽に利用していたように思います。それは学生のニーズに合うように常につとめてきたからということもあったでしょう。他の大学が「気どった大人の図書館」であったとするなら、旭川館は「親しみやすい学生図書館」であったと思います。

学生が図書館を利用するのは、学習室で勉強することやレポート課題の調べもの、雑誌や新聞の閲覧が多いようです。知的刺激を求めて、何か本でも読みたいから図書館で本を選ぼうということではなく、そういった目的があつてのことです。図書館は学生にとって落ち着いて集中できる大事な勉強の場所になっています。ただ、学年が上がるにつれ、学生演習室などにその場所が移行する傾向があるようです。図書館が持つもう一つの役割は「知的刺激を与える場」としての存在です。そのための工夫はいろいろと試みられてきましたが、果たして何人の学生がそのきっかけを得たでしょうか。これは学生側にその潜在的意欲がなければ、なかなかそうはならないのが現状です。

本にはさまざまな知が詰まっていて想像力やアイデアの元になり、良書が人生の糧になることは言うまでもありません。大事な書物は個人で所有

しているでしょう。図書館ではそうした書籍を何万冊も所有しており、それを維持管理していくのに多くの経費がかかっています。

一方、活字の電子化という急速な流れは、電子書籍の形でPCに保管できて、読むだけなら紙の書籍として空間を占有させておく必要がなくなりました。とりわけ、iPadの登場は衝撃です。普通に本を読む感覚で動画など多くの情報を同時に組み込めるのです。いわば個人が図書館をもったようなものです。過去の書物も徐々に電子化されているようです。最近ではwebを通して学術論文をダウンロードできるようになりました。

図書館は、こうした電子化の波が押し寄せる中で、従来の姿からだんだんと変わりつつあるように思います。知の象徴である膨大な量の蔵書は手狭な旭川館では大きな悩みの種でもあります。資料的価値のあるもの、紙の書籍でなければ意味のないものを除いて書物を電子化して、思い切って蔵書空間をスリムにして閲覧室や学習室・史料室を広げていく必要があると思います。その場合、これまで数多くの蔵書に囲まれるという「知の空間」の中で味わっていた、勉強に集中できる雰囲気を維持する工夫が必要になります。図書館の変わらない価値観はそのままに、書籍や資料の電子システムによるサービスと、学生に対して知的刺激を鼓舞するような展示会などが開かれても良いのではないかと考えられます。蔵書がたくさん陳列された従来の図書館の姿は将来なくなり、図書館の役割もそれにつれて変わっていくだろうと思います。

(わだ けいじ)

構成館長
エッセイ

キャッチボールとコミュニケーション

附属図書館岩見沢館長 岡嶋 恒

この4月から、思いもかけず図書館長を務めることになり、未だに語るべき抱負も思いつかない状況です。現在、岩見沢キャンパスには、音楽や美術、スポーツを専門とする学生が数多く在籍しており、それぞれの得意分野である演奏や制作、スポーツ競技といった実技を主体とした活動に積極的に取り組んでいます。反面、図書館を活用する、本を読むといった習慣が極めて少ないと感じております。岩見沢館では学生向けに論文等の資料検索の講習会を行うなど利用の奨励に努めています。活字離れの原因は十人十色ですが、音や映像をまじえて情報収集できるテレビやラジオ、インターネットの方に魅力を感じている学生が増えていることは否めません。情報機器は確かに便利であり、活用することも必要ですが、「目に映るものを、ただ見るだけ」で終わっているような気がしてなりません。私たちが物事を考えるとき、瞬時に判断ができることはそんなに多くはありません。じっくり考える時間が必要です。その意味で、時間をかけて本を読むことによって、自分の考えをより確かなものにし、論理的に意見を述べるできるようになっていきます。また、文字を追いかけてながら、その場面を想定し、自分の心の中で物事を見ることができるようにもなります。人間は、自分自身が体験出来ることには限界があります。読書によっていろいろな世界を知り、自分を成長させていきたいものです。そう言う私自身も、近頃はめっきり読書量が減っているのを実感しています。理由として、私は実用とか教養のための読書でなく、目的を持たずに、手当たり次第に読む、「暇つぶしの」読書を好みますが、「暇をつぶす」時間がなくなったことです。また、年齢のせい目目が疲れやすく、長く文字を読み続けることが苦痛となったこともあげられます。

さて、私は野球観戦が好きで、北海道日本ハムのプレーや勝敗に一喜一憂しています。また、今年の夏の高校野球は、沖縄の興南高校が春夏連覇を達成し終了しましたが、酷暑の中、一球一打に全力を尽くす球児の姿から毎年多くの感動と勇気をもたらしています。平成16年夏の甲子園大会で、駒大苫小牧高校が北海道勢として初優勝したときの興奮と喜びは、今でも忘れることができません。

そんな折、書棚の『いつもキャッチボールが教えてくれた』の書名に目が止まりました。内容は、キャッチボールを「言葉のいらぬコミュニケーション」と捉え、その魅力や楽しさについて述べています。さらに、ボールは相手が捕りやすいようにと、胸元に投げ込む(思いやり)。暴投したら「ごめん!」と言う(マナー)。相手が暴投しても黙ってボールを拾いに走る(ルール)。いい球がきたら思わず「いい球!」と言いたくなる(評価と尊重)。相手の技量や性格を推量できる(相対的な自己認識)。ボールが当たれば痛い(危険認識)。などキャッチボールは、社会生活の基本であるコミュニケーション能力を身に付けるのについてつけの遊びであると書かれていました。

「一球入魂」という言葉があります。相手に対していい加減な気持ちで投げるのではなく、一球一球丁寧に心を込め、行く球に乗せる熱い思いを意味しています。

そして、相手はその思いをしっかり受け取めてくれていると感じることで、相手との信頼関係が深まっていくこととなります。

(おかじま つねし)

特別寄稿

大学図書館における写真の展示

宮崎 茜

ふきのとうが顔を出した今年度のはじまり、大学図書館内にて、写真部の作品として、モノクロ写真を数点ばかり展示させて頂きました。大学図書館の方の協力を得て、4月21日から5月25日まで約1ヶ月間の開催ができました。

写真部では、モノクロ写真の制作を中心とした活動をしています。基本的に、撮影やプリントをそれぞれで行っています。極めて個人的な作業は多いものの、撮影旅行や展覧会の季節になると、集まっています。現在、部員は6名ほどです。

大学図書館における写真展は、図書館の方にホームページ上でご案内して頂けたこともあり、入り口に「Photo Exhibition」の掲示のみで実施させて頂きました。柔らかい告知だったにも関わらず、例年の談話室での開催に比べると、様々なひとに観てもらえたのではないかと考えています。写真部内では、「写真みたよ」と声をかけてくれたひとについての報告を数多く受けました。作品には向けられた視線をカウントしてしまうセンサーを内蔵しており、数値上で図書館以外での展示との間に有意な差がみられたのです、という訳ではありませんが、図書館という場のもつ力に支えられた展示だと思っています。

そもそも、図書館というところは、見えるもの・見えないものについて、いつかの誰かの見出した事実や考察を、少しばかり分けてもらうのに便利な場所です。誰かの“わかったこと”と、自分の“わかっていること”を照らし合わせる過程は愉しく、楽しいからこそ、“わかったこと”の交換は継続されていきます。いま・自分のわかっていることへの感度が高まりやすい場所、と捉えることもできます。

「写真みたよ」と言ったり、「写真だなあ」と内心思ってしまうのは、いつもの図書館と、今日の図書館とを、照らし合わせてみて、違いに気づいていることでもあります。自分の周りのことがわかるとき、自分のことがわかるものです。違い

に気づくのは、図書館でほんの一瞬だけ目に入ってくるモノクロ写真の端々、と場面を切り出すようなもので、写真をする、ということに似ています。写真そのものは「光と時間の化石」と形容されるように、ひとつの記録です。撮りたいと願った瞬間が、結果として記録されているものです。

決定的瞬間はいつもあります。誰もが、生活の中で、目で「写真をする」はずなのです。近年の技術の発達から、フィルムカメラだけでなくデジタルカメラも身近なものとなっており、器機を通しての「写真をする」人も多いはずですが、写真部も、みんな何か特別なことをしている訳ではありません。普通の生活をしています。ただ、時折モノクロフィルムを入れたカメラで撮影し、暗室で作業し、作品を展示して、写真をしています。

もっと簡単な方法もあるはずなのに、なぜモノクロ写真なのか。今までモノクロ写真を焼いてきた先輩達がいることや、白黒フィルムの現像とプリントの器機のそろった環境にあることもあります。それ以上に、モノクロ写真を始めると、続いてしまいます。なぜモノクロ写真なのかというのは、きっと、私なりの答えがまだわからないからです。わからないから、撮り続けているような気がします。“わからないこと”を追いかけることは、図書館の中で継続される“わかったこと”の交換によく似た愉しさなのかもしれません。

(みやざき あかね/北海道教育大学札幌校
写真部・札幌校4年)



特集 私の薦める1冊の本

現職教員が薦める1冊



『新任教師のしごと：新任・新人教師必携マニュアル 中学校・高校版』
小泉博明・宮崎猛著
小学館 2007年

前田 佳希 =文

「来月から中学校2年生の学級担任をしてください。」
もしも、現役大学生のみなさんが、今このような場面に遭遇したら・・・
「大丈夫です！お任せください!!」と堂々と返事ができるだろうか。
大学院を修了したばかりの私は、この電話の後、とにかく不安で仕方がなかった。数学の授業は非常勤講師として少しの経験があったが、問題は学級経営である。学級担任としては素人同然であった。『学級経営』、『生徒指導』、『学活』、『道徳』、『総合』など、これらに関して全くと言ってよいほどイメージがつかめなかった。もちろん、学生時代に特別活動や道徳の講義は受講している。しかし、まじめに受講していたかという反省せざるを得ない。とにかく何をどうしてよいかわからぬまま、現場に立つのだけはよそうと思った。「まずは真似ることが大事」と大学の恩師の言葉を思い出し、とにかく情報を集めることにした。

電話を頂いたその日のうちに近くの書店に駆け込み、「教育コーナー」を探すと、そこにはたくさんの現場の先生方による実践集が並べられてあった。

「読書離れする大学生」が問題視されているが、私もその中の一人であった。「短期間で読めそうなものを・・・」とできるだけ薄く、イラストの多い本を何冊か購入した。

『学級経営』、『生徒指導』、『学活』、『道徳』、『総合』などの実践例はたくさんの書籍が出版されているので、学生のうちに1冊は目を通して、自分が教壇に立ったときのイメージをもっておくとよいと思う。これは十分に2次試験対策にも繋がる。将来、出逢う生徒たちの笑顔を想像しながら夢をみてほしい。

私も未だに「これは使えそうだ!」「これは無理かも。」という実践例がある。生意気にも「この実践は意味があるのか。」と思うものもある。そういうことも含めて勉強になるのではないだろうか。とにかく多種多様な指導を吸収し、真似て、自分のオリジナルの指導がつけられていくと思っている。常に謙虚でいたい。

そのときに購入した本の中から、この1冊を紹介したい。

短期間で教職のすべてを理解しようなんて無理な話ではあるが、学生のみなさんが中学校教師の仕事内容をイメージでき、基礎知識を蓄えるには十分であろう。しかし、注意したいのは「本」の通りには必ずしもいかないことである。教職は、マニュアル通りにいかないから難しく、楽しいのかもしれない。現場には、たくさんの生徒がいるのである。

(まえだ よしき／旭川市立北門中学校教諭)

現職教員が薦める1冊



『教育とはなんだ：学校の見方が変わる18のヒント』
重松清著
ちくま文庫 2008年

紺谷 正樹 =文

代表作「エイジ」、最近では「十字架」で吉川英治文学賞を取った著者だが、意外にも教育に造詣が深い。出身大学が早稲田大学教育学部卒業、妻が長年高校の教師であったことに起因していると想像する。そんな著者が教育について様々な先生方にストレートに質問をぶつけ、時には苦笑いされる。全編、会話形式でそれぞれが20ページ程度なので、さっと読める。

この本で感じてほしいのは「多面的に教育を見る習慣をつける」ということである。大学で習ったことを実践すれば、うまくいくとは限らない。時に正反対ことをした方がうまくいくことだってある。保護者からも職場からも信頼を得ている教師は、得てして「柔軟性」を持ち合わせている。この柔軟性を養うのにふさわしい1冊として推薦する。

(こんや まさき／岩見沢市立東光中学校教諭)



現職教員が薦める1冊



『算数の授業で教えてはいけないこと、教えずにはいけないこと』
正木孝昌著
黎明書房 2009年

古川 知志 =文

教育実習などで実際に子どもの前に立って授業をしてみると、学べるものがたくさんあると思います。なかなか子どもに伝わらなかったり、子どもの意外な反応があったりと。子どものことをたくさん知ること、新たな視点で子どもを見ることができるでしょう。この本の著者は算数の先生ですので、算数の実践的な例を中心に書かれています。しかし、単なる算数の授業の How to 本ではなく、「授業って…」とか、「子どもって…」といった一つの考え方を学ぶことができます。この本を通して、授業に対する考え方をより深めることができると思います。

(ふるかわ さとし/本学附属札幌小学校教諭)

大学院生が薦める1冊



『全集日本の歴史』全16巻
小学館 2007年～2009年

深澤 智成 =文

近年、漫画やアニメなどで、歴史上の人物が登場することが多くなりました。その中で描かれている人物像に共感を覚え、歴史に興味を持つ人が増えて、「歴女」なる造語も作られました。歴史に興味を持つ動機は、個人それぞれだとは思いますが。しかし、漫画などのように作られた歴史像・人物像を、鵜呑みにしている人が多いのは如何かと思います。このような一部の歴史だけを見て、歴史を知っていると言い切ってもいいのでしょうか？私はそうは思いません。

国際化が進む現代において、様々な国の人たちと出会うきっかけが、色々あるでしょう。そうした時、お互いの国・文化の違いを理解するために、必要なことは色々あると思います。しかし、最低限、自分の国の事を知っておく必要があるでしょう。有名な話に、エリート外交官が海外に赴いた時、日本史についての質問攻めに答えられなくて、任期の全てを日本史の勉強にあてたという笑い話があります。このようなことが積み重なれば、日本および日本人は、国際社会に馴染むどころか、乗り遅れてしまうのではないのでしょうか。外の世界に目を向けるのもよいですが、最低限の教養として、自分の生まれ育った国について、時間のある学部生のうちに、勉強してみてもはどうでしょうか？

そこで、今回オススメするのが小学館からでた『日本の歴史』(全16巻)です。全16巻と聞くと多いと思いますが、だいたい時代ごとに区切られていますので、全部読まなくとも、興味を持った巻を手にとるといいと思います。また、小学館らしく平易な文章で書かれているので、専門書ではなく、一般書として読めるはず。知り合いの高校の教諭も、教材研究の導入書として「この本はいい」と、教育現場の日本史の先生も、お勧めしているこのシリーズ。まずは一冊、手に取ってみてはどうでしょうか？

歴史を勉強することは、自分が歴史の中で生き、歴史の中で生活し、そういう歴史に働き掛け、新しい歴史を作っていく存在であると自覚することと言われます。現代社会を見つめるうえでも、この際ぜひ日本の歴史を、見つめ直してみてもはどうでしょうか？その手助けとして、今回の紹介が役に立てば、日本史教育を専攻する者として何よりです。

(ふかざわ ともなり/函館校修士課程)

特集 私の薦める1冊の本

大学院生が薦める1冊



『99.9%は仮説：思い込みで判断しないための考え方』
竹内薫著
光文社新書 2006年

細川 遼太 =文

本書は、科学の基本「世の中ぜんぶ仮説にすぎない」について、科学的な事例に焦点をあて、分かりやすく説明している。本書を通じて、私たちはどのような仮説に支配されているか、思い込みで判断しないコツはどのようなものか、これらの疑問について考えさせてくれる。

「科学は嫌いだ!」という人に向けて言い直すならば、「頭を柔らかくするにはどうすればよいのだろうか?」という疑問に対して、ヒントを与えてくれる本である。物事には、多様な見方があることを、具体事例を通じて実感させてくれるだろう。文系・理系問わず、頭を柔らかくする契機となるはずだ。

突然話は変わるが、レポートを作成する際に考慮することは何か。それは、提示されたテーマに対して、自分なりの問いと答えを設定し、それらを説明することである。私の指導教員の言葉を借りて言い換えるならば、「仮説を立て、それを証明すること」となる。

レポート作成の他、ゼミでの演習、そして卒業論文など、大学生活では、様々な場面で自身の考えを説明することが要求される。つまり、仮説を立てることは、私たち大学生にとって、強く意識しなければならないものとなっている。

しかし、私たちはレポートなどの作成にあたり、仮説を立てられず、困ってしまうことが多々ある。では、なぜ、仮説をたてられず困る場面が出てくるのだろうか。誤解を恐れずに言うならば、テーマについて思い込みで判断し、仮説となる疑問を自ら見逃しているため、と考えられる。

思い込み、常識、先入観、固定概念、これらは、私たちに強く影響を与えるものだ。これらに縛られては、新たな疑問、言い換えるならば「仮説」を発見することができない。レポート作成では、思い込みや常識と思われる物事に対して、異なる観点から捉える必要があるのではないだろうか。

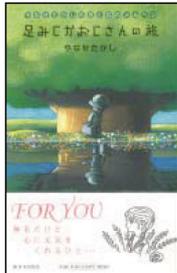
長くはなつたが、本紹介に話を戻そう。本書は、科学の基本、頭を柔らかくする契機としての役立ちものではない。先に挙げたように、レポート作成時に必要となるものは「仮説を立て、それを証明すること」である。そのため、本書は、「仮説」というキーワードを通じて、レポート作成などへの示唆を与えてくれるだろう。

科学について知りたい人、頭を柔らかくしたい人、レポート作成に困っている人、ぜひ、『99.9%は仮説 思い込みで判断しないための考え方』を手にとっていたいただきたい。

(ほそかわ りょうた／釧路校修士課程)



学部生が薦める1冊



『やなせたかしのおとなのメルヘン 足みじかおじさんの旅』
新日本出版社 2009年

『復刻版やなせメルヘン名作集』
カザン 2009年

杉山 亜里紗 =文

やなせたかしの名前を聞いたら、多くの人がまずアンパンマンの作者であるということ連想するだろう。私もそうであるため、この2冊の本を書架で見つけた時に手に取って借りてみることにした。やなせさんの書く小説がどのようなものなのか興味を持ったのだ。私が今回この原稿を書くに当たって選んだ『復刻版やなせメルヘン名作集』、『やなせたかしのおとなのメルヘン 足みじかおじさんの旅』はどちらも月刊誌『食生活』に掲載されていた、1話で完結する短い物語を集めた本である。

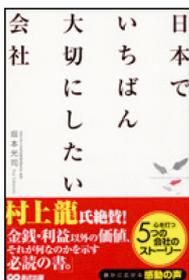
『復刻版やなせメルヘン名作集』には、『食生活』にて1973年から1986年までに連載されていた「やなせメルヘン」から選ばれた20話が、当時やなせさんが描いた挿絵と共に収録されている。「やなせメルヘン」については、冒頭でやなせさん自身が「メルヘンといっても、世間で言っているメルヘンとはちがうような気がしたので僭越ながら『やなせメルヘン』とネーミング。」と述べている。確かにおとぎ話や童話とは異なり、昔話でもなくほとんどが日常を舞台にした話である。その日常に、現実離れした“メルヘン”な出来事が起こり、全部がハッピーエンドというわけではないのだけれど、物語を心温まる結末にしてくれるのだ。

『やなせたかしのおとなのメルヘン 足みじかおじさんの旅』は、同じく『食生活』に掲載されていた「やなせメルヘン」の足みじかおじさんのシリーズから35話選ばれて、こちらも挿絵と共に収録されている（こちらはいつごろ連載されたのか表記されていないが、作中にパソコンや携帯電話が出てくるので最近のようである）。足みじかおじさんとは現実と非現実の間に存在し、人助けを仕事としている。その名の通り足が短く、年齢や正体は不明。黒い服を全身にまとい、いつも逆光の中にいるので顔は見えないという設定である。この足みじかおじさんが、困ったことや悲しいことのあった主人公の元に突然現れ、念力や不思議な道具を使ったり、語りかけたりすることで主人公達の問題を解決するというのが話の流れである。しかし人助けを行っているものの、彼の言う台詞はひねくれているためにただのいい人には感じられない。その辺りに私は好感を持てる。

1話1話が短いので内容についてはあまり触れられなかったが、一息入れたい時などにぜひ読んでほしい。軽いような重いようなそれぞれのストーリーが、どこなく温かみをもたらしてくれると思う。

(すぎやま ありさ/釧路校1年)

教員が薦める1冊



『日本でいちばん大切にしたい会社』
坂本光司著
あさ出版 2008年

二橋 潤一 =文

就職対策委員長という立場だと、どうしても就職に関わる記事に目が行きます。最近、本屋の店頭で「日本でいちばん大切にしたい会社」という本を見つけ読んでみました。きっと日本や世界をリードしている大企業のことや現代の経済状況などが書かれているのだろうと思いましたが、さにあらず中小企業で全国的な知名度も高くない会社のことが挙げられています。著者は6000を超える会社を訪問調査したということで、その文章には著者が真に大切にしたい会社の姿が感動的に描かれています。世界的なグローバル化の中で生き残りをかけて経済効率最優先で突き進んでいる大企業の傍らで、社員や地域の幸せを考えた、人間的な経営を行っている会社が紹介され、働くことの意義や正しい経営が語られています。就職を考えている学生諸君に是非目を通して欲しいと思います。

(にはし じゅんいち/岩見沢校教授)

特集 私の薦める1冊の本

教員が薦める1冊



『少年アート』改訂版
中村信夫著
弓立社 1993年

伊藤 隆介 =文

現代美術センター・CCA北九州ディレクターの青春期。パンク勃興する1970年代のロンドンを舞台にした、アート版「ジョン万次郎漂流記」だ。学生時代に読み、「現代美術の地図には、日本は存在しないも同然」という、あられもない正論は衝撃だった。「では、どうしたら？」と考え始めたのが、僕なりの学びの一步だったと思う。

赴任した際、図書館にも蔵書してもらった。現代美術作家として活躍する出田郷くんも、この本をきっかけにした諸君の先輩だ。若者の冒険心を励ます本書が、重版されずに読まれなくなるのは惜しい。

画家のジュリアン・シュナーベルが監督した映画「バスキア」(1996)や、オリバー・ストーン「ウォール街」(1987)も見れば、その後のアート界の変貌と問題点についても気がつくだろう。

(いとう りゅうすけ/岩見沢校准教授)

教員が薦める1冊



『宇宙ダンス：新しい身体をつくる』
福原哲郎著
春秋社 2008年

岩澤 孝子 =文

本著は、舞踏家福原氏の「スペースダンス・イン・ザ・チューピング」による、身体の再発見をベースとした「新しい身体生活のデザイン」に関する提言である。チューピングは、弾力性のある布でできた「やわらかい空間」で、ミュージアム等に展示され、ダンス公演の他、一般向けのワークショップにも利用されている。宇宙空間のようなチューピング内部を体験した参加者は身体感覚を覚醒させるという。「宇宙ダンス」という突拍子もないプロジェクトについて読み進めていくうちに、不思議にリアルな身体感覚を味わえる好著である。

(いわさわ たかこ/岩見沢校准教授)

教員が薦める1冊



『トムラウシ山遭難はなぜ起きたのか：低体温症と事故の教訓』
羽根田治ほか著
山と溪谷社 2010年

山田 亮 =文

2009年7月16日、大雪山系のトムラウシ山で18人のツアー登山パーティーのうち8人が死亡するという夏山登山史上最悪の遭難事故が起きました。そこには暴風雨に打たれ、力尽きて次々と倒れていく登山者がいました。2010年2月24日には事故調査委員会による最終報告書が出され、今回の事故がガイドによる判断ミスと低体温症によるものと結論づけられました。本書では遭難事故の詳細を、一人の同行ガイドの証言や事故の経過、気象遭難、低体温症、運動生理学、ツアー登山の問題などの観点から検証しています。アウトドア・ライフ専攻の学生に限らず、将来スポーツ指導の現場に携わっている学生に是非読んでもらいたい1冊です。

(やまだ りょう/岩見沢校講師)

2009年度図書館統計

附属図書館利用統計(平成21年度)

| 項目 | 全館 | 札幌館 | 函館館 | 旭川館 | 釧路館 | 岩見沢館 | |
|---------|-------------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|
| 開館日数(日) | | 343 | 319 | 329 | 345 | 325 | |
| 内訳 | 開館日数(平日) | | 240 | 220 | 230 | 236 | 226 |
| | 開館日数(休日) | | 103 | 99 | 99 | 109 | 99 |
| 入館者数(人) | 427,568 | 135,243 | 73,385 | 104,205 | 63,770 | 50,965 | |
| 内訳 | 入館者数(学内) | 417,742 | 134,333 | 72,339 | 98,257 | 62,192 | 50,621 |
| | 入館者数(学外) | 9,826 | 910 | 1,046 | 5,948 | 1,578 | 344 |
| 貸出冊数(冊) | 84,325 | 18,578 | 18,973 | 20,824 | 18,180 | 7,770 | |
| 相互利用 | 文献複写(受付)(件) | 3,537 | 1,727 | 711 | 503 | 331 | 265 |
| | 文献複写(依頼)(件) | 4,720 | 1,660 | 1,078 | 811 | 835 | 336 |
| | 図書貸借(貸出)(冊) | 2,465 | 721 | 552 | 433 | 400 | 359 |
| | 図書貸借(借用)(冊) | 2,528 | 613 | 571 | 520 | 606 | 218 |

附属図書館所蔵統計

平成22年3月31日現在

| 項目 | 全館 | 札幌館 | 函館館 | 旭川館 | 釧路館 | 岩見沢館 | |
|--------|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 所蔵数(冊) | 1,018,246 | 270,551 | 251,163 | 173,608 | 186,184 | 136,740 | |
| 内訳 | 和書 | 895,916 | 234,550 | 218,615 | 152,989 | 166,371 | 123,391 |
| | 洋書 | 122,330 | 36,001 | 32,548 | 20,619 | 19,813 | 13,349 |
| 分類 | 総記(和書) | 98,214 | 34,516 | 29,815 | 6,511 | 16,155 | 11,217 |
| | 総記(洋書) | 13,244 | 3,390 | 1,666 | 1,441 | 4,507 | 2,240 |
| | | 111,458 | 37,906 | 31,481 | 7,952 | 20,662 | 13,457 |
| | 哲学(和書) | 60,223 | 14,780 | 14,712 | 12,074 | 10,746 | 7,911 |
| | 哲学(洋書) | 13,844 | 3,715 | 3,557 | 3,395 | 2,081 | 1,096 |
| | | 74,067 | 18,495 | 18,269 | 15,469 | 12,827 | 9,007 |
| | 歴史(和書) | 92,181 | 25,227 | 20,605 | 17,231 | 19,423 | 9,695 |
| | 歴史(洋書) | 7,914 | 2,135 | 1,665 | 1,845 | 1,480 | 789 |
| | | 100,095 | 27,362 | 22,270 | 19,076 | 20,903 | 10,484 |
| | 社会(和書) | 271,320 | 70,864 | 63,625 | 50,874 | 48,567 | 37,390 |
| | 社会(洋書) | 25,594 | 8,967 | 6,288 | 4,783 | 3,605 | 1,951 |
| | | 296,914 | 79,831 | 69,913 | 55,657 | 52,172 | 39,341 |
| | 自然(和書) | 97,773 | 26,059 | 20,742 | 19,842 | 18,881 | 12,249 |
| | 自然(洋書) | 18,536 | 5,086 | 6,938 | 3,398 | 1,910 | 1,204 |
| | 116,309 | 31,145 | 27,680 | 23,240 | 20,791 | 13,453 | |
| 内訳 | 工学(和書) | 30,981 | 7,669 | 9,010 | 4,707 | 5,902 | 3,693 |
| | 工学(洋書) | 1,972 | 853 | 449 | 234 | 256 | 180 |
| | | 32,953 | 8,522 | 9,459 | 4,941 | 6,158 | 3,873 |
| | 産業(和書) | 22,598 | 6,458 | 5,848 | 3,509 | 3,901 | 2,882 |
| | 産業(洋書) | 1,262 | 497 | 386 | 173 | 110 | 96 |
| | | 23,860 | 6,955 | 6,234 | 3,682 | 4,011 | 2,978 |
| | 芸術(和書) | 71,129 | 12,165 | 14,491 | 12,612 | 11,022 | 20,839 |
| | 芸術(洋書) | 6,724 | 1,879 | 1,071 | 904 | 577 | 2,293 |
| | | 77,853 | 14,044 | 15,562 | 13,516 | 11,599 | 23,132 |
| | 語学(和書) | 35,079 | 10,195 | 9,426 | 5,452 | 6,313 | 3,693 |
| | 語学(洋書) | 13,810 | 4,405 | 4,617 | 1,685 | 1,747 | 1,356 |
| | | 48,889 | 14,600 | 14,043 | 7,137 | 8,060 | 5,049 |
| | 文学(和書) | 116,418 | 26,617 | 30,341 | 20,177 | 25,461 | 13,822 |
| | 文学(洋書) | 19,430 | 5,074 | 5,911 | 2,761 | 3,540 | 2,144 |
| | 135,848 | 31,691 | 36,252 | 22,938 | 29,001 | 15,966 | |

LIBRARY NEWS 附属図書館からのお知らせ

第3回附属図書館懸賞論文募集



「本との出会いを大切に、すばらしい本との出会いを皆に伝えてほしい」という趣旨のもと、第3回附属図書館懸賞論文を募集しております。優秀者には賞状および豪華賞品を贈呈いたします。また、応募者全員に参加賞を進呈しますので、奮って応募ください。

【課題】 図書館で所蔵している図書を読み、小論文または読書感想文（エッセイ、随筆を含む）を作成してください。（図書のジャンルは問いません。）

【部門】 I「小論文」部門およびII「感想文」部門

【応募期間】 2010年10月1日（金）～2011年1月7日（金）

【応募資格】 本学学生（学部学生、大学院生、留学生等）

【応募要領】

1. 字数4,000字以上
2. 電子ファイル（Wordまたはテキスト形式）を下記メールアドレス宛てに送付してください。
3. 作品の1行目に、キャンパス名・課程名・学年・学籍番号・氏名・連絡先（電話番号・メールアドレス・住所）・部門（I：小論文、II：感想文）・希望する副賞を記述すること。2行目に、タイトル・対象図書の書名・著者名・出版社を記述すること。
4. 応募作品は1人1編とし、応募者自身のオリジナルな未発表作品とする。

【作品公表】 受賞作品は図書館報および附属図書館ウェブサイトに掲載します。

【応募・問合せ先】 t-somu@sap.hokkyodai.ac.jp

※詳細はポスター・ちらし・ホームページでご確認ください。

注! 優秀賞副賞 ミニノートPC
 佳作副賞 デジタルカメラ、
 iPod または電子辞書のいずれか

全館共通

ジャパンレッジを活用しよう!

日本国語大辞典、日本大百科全書、日本人名大辞典、ランダムハウス英和大辞典、東洋文庫等幅広い分野のコンテンツが搭載されているジャパンレッジ（オンラインデータベース）を導入しました。論文・レポート作成、調べものなどに是非ご活用ください。

『聞蔵Ⅱビジュアル』にバージョンアップしました!

朝日新聞創刊号（明治12年）から現在までの記事（1,200万件以上）が検索可能になりました。学習・研究に是非ご活用ください。

自動貸出返却装置・入館管理システムの導入

利用者サービスとセキュリティの向上を図るため、上記システムを全館に導入します。設置は12月頃の予定です。

自動貸出返却装置は、利用者自身で図書の貸出・貸出延長・返却手続きをおこなうためのシステムで、図書館利用がより便利になります。なお、入館管理システム導入後は、学生証または図書館利用証を、忘れずに携帯するようにお願いします。

構成館 Topics

函館館

新書文庫コーナーをリニューアルしました。シリーズごとに配置が変わりましたので、わかりやすいようにコーナー付近に配置図を掲示しております。今後、勉強の合間の息抜きとして読めるものを少しずつ増やす予定でありますので、どうぞご期待ください。

旭川館

このたび、児童書コーナーが新しくできました。新着図書も次々と入っています。大人が読んでもおもしろい図書ばかりなので、この機会にぜひご覧ください。

